
魔法？いいえ、手品ですっ！

愛月逆夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法？いいえ、手品ですっ！

【Nコード】

N1855J

【作者名】

愛月逆夜

【あらすじ】

故郷へと帰ってきた主人公、小山内慎のもとに現れた不思議な美少女、漣綾香。すべてはこいつから始まった！？

魔法…使い…？

幼い頃の俺と、1人の少女。

悲しむ僕に君は言った。

「大丈夫、絶対…絶対にまた会えるから…！」

泣いている僕に笑顔で君は応えてくれた。

「奇跡は…絶対に起こるから…！」

僕は必死で涙を堪えようとする。

「」

「うん……………うん！」

嬉しそうに何度も頷く君の姿。

そこから何もかもが真っ白になっていって…………。

それと同時に…………。

不思議な浮遊感がやってきて…………。

…………。

急降下。

ドンッ！

「うあっ…！」

左半身に衝撃的な痛みが走った。

「つつううう…！」

どうやら毛布ごとベッドから転落したらしい…。

何か…だらしがないなあ…そこまで寝相悪かったわけ…？

多少不思議に思いつつも俺はゆっくりと起き上がる。

毛布がクッションになってくれたお陰か痛みはそんなになかった。

「ふう…………」

なんとなくあたりを見回す。

部屋の一角に山積みのダンボール。

ずいぶんとこざっぱりした…。

というかベッド以外何もないこの部屋。

…帰ってきた…んだよな…。

故郷…。

幼い頃、父親の仕事の都合で遠くへ引越すことになった。

そして今、母親の希望もあってか再びここに戻ってきた。

物心つく前だったからそんなに鮮明には覚えていないけど…。

ここにはたくさん思い出がある。

…ある。

……？

何か思い出せない？

一人の…少…女？

「痛っ……」

頭痛……。

俺は思わずこめかみを押さえる。

どうしても思い出せない…。

名前も…。

………ピ——

………ピピピピピ——

ピピピピピピ——

「時計？…そんなのまだ出してなかったような…」

俺は音の鳴っている方向を探す。

…先ほど、落ちたと同時に毛布まで床に落ちてしまったワケだが…。

………。

「んんうゝ……」

そういえば今思い出したが俺はそんな音の出る目覚ましは持ってい

ない。

そもそも『7時半』に目覚ましを設定する事なんてまずなかった。というか目覚まし無しでも俺は決まった時間に起きられる自信がある。

つまり俺はここに来たときから目覚まし時計なんて持ってきていなかったという事だ。

じゃあ何で目覚ましが鳴るのかという不思議すぎる事件なのだけれど…。

「うゝ寒っ…。ちよっとお…毛布くらい掛けてよおー…」

たとえばここで科学的に考えてみることにしよう。

ここに目覚まし時計があるという事は誰かがここに持ってきたという事だ。

あ、一言言っておきますが俺は一人っ子でございます。

「んんうー…」

なので無いとは思いますが兄弟が俺のベッドに潜り込むなんて事はまずありません。

ましてや美少女が紛れ込むなんて絶対ありえません。

「毛布うー…」

なんと言えはいいかまったく思い浮かばない。

とりあえず毛布をとります。

振りかぶります。

「誰!?!」

そして投げつけます。

「うぎゃっ!」

「『うぎゃっ!』じゃなくて……………ああそうだ…警察警察…俺はわざとらしくケータイを探す。

驚いたのか不審者は必死で弁解を試みてきた。

「ま、まあ落ち着きなさいよっ…!こっちだって昨日から徹夜で『部活動説明会』のネタに困ってるんだからっ!」

「いやいやいやいや、明らかに一晩俺のベッドにいたよね髪の毛の崩れ

とかパジャマとか何よりの証拠すぎるじゃないかっ…！」
そう、どう見てもその姿は完全に寝てた以外説明がつかない状況だった。

「クスッ……」

「…！」

一瞬俺には彼女が微笑んだように見えた。
その表情1つ変わっただけで、まるで何かスイッチが切り替わったようだった。

「ずいぶんと…変わったなあ…」

まるで何かを懐かしんでいるような不思議な笑み。
それを見て俺は何かを思い出せそうな気がした。
どこかで見た、なんだか懐かしい…。

少……女………？

頭痛。

「痛……」

先ほどよりもひどくなっていた。
苦しいというワケではないんだけどなんだかぐにやぐにやる。
彼女は俺がそうなった事に気づいたらしい。

「おっと…」

と言って何故かゆっくりとベッドの上で立ち上がった。
両手で毛布を握っている。

「今はあまり干渉しちゃいけなかったかな…」

「え…？」

「クスッ…まあいいや、どうせすぐに思い出しちゃうんだろうし…」
全然、話が読めてこないぞ？

「どういうことだ？君は一体…」

彼女はゆっくりと俺に背中を向ける。

俺の方に一度振り返った。

そして

「See you next time!」

そう叫ぶと両手に持っていた毛布を空中へ放り上げた。

毛布はしばらく空中を舞っていたがゆっくりと彼女へと。

掛かっていく、のだ普通。

「……!？」

一瞬俺は目を疑った。

その毛布は、まるで『そこに人などいなかったように』形を変えることなくベッドへと落ちたのだ。

「え…？」

今時そんなのアリか!？

そんな事ができてしまうならもう…。

……!

……何か関係があるのだろうか…。

俺はベッドに近づいてゆっくりと毛布をめくった。

「はぁ……めくるか？普通……」

「そりゃ誰だってめくりたくなりますよ」

「せっかく格好よく終わらせようと思ったのに…」

「いや、終わらせても誰も得しないです」

結論を言おう。

彼女はただの人間だ。

そして俺の口調がなぜ変わったのかはよくわからない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1855j/>

魔法？いいえ、手品ですっ！

2010年10月10日02時25分発行